

## 特集 近代の岡山と東アジア—塩・人・書画—

### 序

遊佐 徹

本特集は、平成26年度に岡山大学「大学機能強化戦略経費」の大型研究推進支援項目として採択されたプロジェクト「岡山の塩業家野崎家が形成した近代アジアネットワーク—塩・人・書画—」の研究活動の一環として企画された国際シンポジウムにおける研究報告をまとめたものである。それゆえ、まず当該プロジェクトについてその趣旨・目的を紹介するところから小文は書き起こさなければならない。

岡山の児島の地で今もなお製塩業を営む野崎家（現在の事業者名はナイカイ塩業株式会社）は、近世以来岡山屈指の実業家、名望家として知られている。この野崎家が、明治から大正にかけての第3代当主野崎武吉郎（岡山大学の前身である第六高等学校の岡山誘致に大きく貢献した人物でもある）時代に政治的、産業的そして文化的にも東アジア地域に広がりゆくネットワークを築き上げていた事実は、岡山の地において学ぶ私達にとって、ローカルとグローバルの要素を併せ持つ極めて今日的かつ興味深い研究テーマであろう。

やや具体的に述べれば、それは、野崎武吉郎が「脱亜入欧」路線を批判しアジアとの連携を主張し行動した犬養毅や近衛篤磨らと結び、また今日アジア主義実業家と知られる白岩龍平らに援助の手を差し伸べる一方で、張謇や文廷式といった少なからぬ清朝の改革派官紳の訪問を受けていた点、台湾での事業展開や中国への近代的塩業技術の移転に寄与した点、中国人を中心とした人的交流の中で交わされた漢詩文や応酬と購入によって培われたコレクションの存在、という個別のテーマの集合体として見出せるものである。プロジェクトでは研究主管者（遊佐、土屋）の専門性に鑑みて、それらを産業・経済ネットワーク、人的ネットワーク、文化ネットワークとして捉え直し、分析と研究を進めることとした。「塩・人・書画」をプロジェクト名にサブタイトルとして付したゆえんである。

上文を一読していただければ直ちに了解可能であるように、このプロジェクトの立案に当たっては、岡山が強く意識されている。これは、岡山大学の改革プランである「地域に根ざし世界に輝く—創造的国際学都を目指して—」に対する人文学研究者からの回答の側面を持つことはもちろんのこと、地方（岡山）から日本の近代史や近代アジア交流史を眺め直し、書き換えの可能性を模索するという学究的野心を背景に持つ挑戦的な取り組みとして構想されたものであることも強調して置きたい（その意欲と実践は、平成27年度には「もう一つの学都岡山物語—閑谷学校を中心とする近代東アジアネットワークの研究—」に継承されていることも併せて紹介して置きたい）。

こうした研究視点、研究目的のもと、私達は本プロジェクトの一環として平成27年2月12日に国際シンポジウム「近代の岡山と東アジア—塩・人・書画」を開催した。以下に、その折に提示した開催趣旨を採録する。

「岡山がより魅力ある地域として輝いていくためには、海を越えて人やモノが行き交う場として、岡山がより世界に開かれていくことが求められよう。歴史をひも解くと、近代の岡山には、人やモノを通じて岡山と世界を結ぶネットワークが築かれていた。特に岡山と中国、台湾といった東アジアとのあいだに築かれた政治、経済ないし人文芸術分野におけるネットワークには、特筆すべきものがある。本シンポジウムは、江戸時代以来、製塩業で家を興し、企業家としてのみならず、政治家や美術品收藏家としても知られた備前児島の野崎家、また新聞記者、楽善堂主人として長く上海に滞在し、日本と中国でその名を残した岸田吟香といった岡山ゆかりの人びとやその活動を取り上げ、近代の岡山と東アジアとのあいだに形成されたネットワークに接近しようとするものである。そこで特に、塩・人・書画という三つの視点を設定して、それを導きの糸としながら、このネットワークの内部へと分け入っていきたい。本シンポジウムを通じて、近代の岡山がいかに東アジアに開かれ、また東アジアといかに関わったのかをあらためて認識し、未来の岡山と東アジアとの関係を構想する糧としたい。」

この趣旨のもと、国内外からお招きした5名の専門家による研究報告（下欄参照）と活発な質疑応答が繰り広げられ、シンポジウムは成功裏に幕を下ろしたが、このたび、その成果を岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』の場をお借りして改めて公開することができることとなった。これによって、岡山を核とする「知」のネットワークがますます拡大してゆくことを願ってやまない。

◎シンポジウム報告者と報告テーマ（報告順、敬称略）

土屋 洋（岡山大学准教授）

「明治・清末期、野崎家を訪れた中国の官紳」

陳 祖恩（中国・東華大学特任教授）

「岸田吟香の上海における文化活動（岸田吟香在上海的文化活動）」

古川 文子（岡山県立美術館学芸員）

「野崎家コレクションの中国絵画」

高 淑媛（台湾・国立成功大学助教授）

「日治初期の野崎武吉郎と台湾布袋塩業」

太田 健一（山陽学園大学名誉教授）

「野崎家が支援した二人の青年—小西増太郎・白岩竜平とアジア—」

〔付記〕シンポジウム報告者の太田健一先生が本年1月23日に御逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。